

# 宮沢賢治と高橋秀松

— 名取川・広瀬川水系「地域創生」を  
目指した二人の友情への賛歌 —

東北大学名誉教授  
大内 秀明

# 盛岡高等農林

〔現・岩手大農学部〕



# 「賢さん」は花巻から、 「秀さん」は名取から

- 「賢さん」は盛岡中学から、「秀さん」は宮城農学校から盛岡高等農林へ
- 盛岡高等農林では、二人が同級・同寮・同室
- 賢さんは第二部・農芸化学科  
秀さんは第一部・一般農学・農政経済





# 岩手山

「小岩井農場より望む」

# 「寄宿舎での賢治」 (賢治全集 月報9)

- それからのあとは、賢治とわれとは全く兄弟同様の交友をつづけた。そして賢治は、その妹敏子さんが目白の女子大から一週間に必ず一度の消息をよこすと、私の前で開き読み合う。
- ここに三人の兄弟が出来上がった。敏子さんの文章と文字は賢治のそれとは比べならぬ程優れたものであった。この文の頭にかかげた年賀状の二行目に「みんな何でもないそうな」という真の意味は、妹を中心に消息をもらしたものと私丈けに通じたわけである。
- 「何にも無い。みんな何でもないそうな」
- これは賢治の年賀状である。---彼が盛岡高等農林学校に入学した翌年の正月のものである。

賢治の妹 宮沢トシ

(一八九八〜一九三三)



# 「宮沢賢治の人間像」 高橋秀松「宮沢賢治の人間像」(月刊誌『七十七』No.81, 1964年より)

- いつしか各々の人生目標を主題に話し合うようになり、第二学期までに専攻研究科目を協議決定しようと約束しました。
- 偶然にも二人とも盛岡農高を志願した根本の動機は、東北農民から最もおそれられている夏の寒冷の害を除いて、暗い冬を無くそうという点で合致していたので、結局二人で分担を決め、互いにその専門を究めて目的を達成しようと話しは一決したのであります。
- それで賢治は、土壌、肥料の面から、開花、稔実の時期をその年の気象条件に合わせて、冷害から護ることを研究眼目とすることとし、
- 私は、稲の品種を改良して、冷害に強い、新品種を育成し、且寒冷による稲の病害を、予防駆除する為め、植物病理学をも専攻に加えることにした。



種山ヶ原 風の又三郎像



# 卒業後の二人の人生は？

- 秀さんは、宮城にポストが無かったのだから水戸の農学校へ、そして京都帝国大学経済学部選科生、卒業後は安田保善社、安田銀行へ

「品種改良の面を担当する事を約束した私が、いつの間にか見切りをつけて政治経済学の方へ転向して了つたのですから、彼はどんなに私に不満をいただき失望したか知れないわけです。」(「四次元」4巻4号)

- 賢さんは、研究生に残り、花巻に帰り、農学校の教諭、「産業組合青年会」(1924)、1926年農学校を退職、羅須地人協会を設立、「農民芸術概論綱要」書く。

「そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足である<農村経済>について少し研究したいと思っています。」(岩手日報)

1931年 東北碎石工場の技師、5月11日小牛田、仙台から名取郡岩沼町鈴木商店に石灰(土壌改良剤)の販売活動

1933年9月5日 「産業組合青年会」を須賀川の「北方詩人会」、同月21日死去



羅須地人協会(花巻農業高校内)

# 「秀さん」故郷・名取へ帰る(1944年)

- 1944年 敗戦の前に名取へ帰郷(増田町・亘理屋)
- 1947年 増田町・農業共済組合長(初代、農業協同組合に改称)
- 1956年 名取町・農業協同組合理事  
名取町長から初代名取市長へ
- 「日本農業の動向と名取町農業振興について」(広報なとり15、17号) ①酪農、果樹園芸など商品性、②適地適産の集団生産農業＝農協
- 「東北の米作は行き詰らぬ」 ①土壌改良、②肥料技術、③技術向上
- 名取市政1周年、「百年の計、名取耕土の美田化・土地改良事業の着手」(広報なとり35号)

# 「秀さん」の「賢さん」への熱い想い！

- 私が「賢さん」からうけた影響は、彼れはいつも自然そのものの中に生き、話し合い、自然そのものを至上の友としていたという点である
- 私は「賢さん」が現に生きていることによって生き甲斐を感じている一人である。とくに心痛めるとき、この故き友を偲び、無電通話ができたとき、私は再び元気になり、世界全体が幸福になる為に微力をささげる意欲をとりもどすのである。「賢さん」は私にとっても永遠の力である。（高橋秀松「宮沢賢治の高農時代」、月刊誌『七十七』1963年，9月号より）



「賢さん」の供養塔(花巻市身照寺)



「秀さん」の墓(名取市飯野坂「明観寺」)



「秀さん」の墓碑銘（名取市飯野坂「明  
観寺」高橋家之墓）

みたまわ

空にかがやき

かばねわ

大地にねむる

七度生れ

人世につくせ

昭和三十五年六月吉日

高橋秀松 建之

# 農民芸術概論綱要 序論

われらはいつしよにこれから何を論ずるか  
おれたちはみな農民である ずあぶん忙しく仕事もつらい  
もつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい  
われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった  
近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい  
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない  
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する  
この方向は古い聖者の踏みまた教えた道ではないか  
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある  
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである  
われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である

# 農民芸術の興隆

何故われらの芸術がいま起こらねばならないか  
曾てわれらの師父たちは乏しいながら可也楽しく生きてゐた  
そこには芸術も宗教もあつた  
いまわれらにはただ労働が 生存があるばかりである  
宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い  
芸術は今われらを離れ然もわびしく墮落した  
いま宗教家芸術家とは真善若しくは美を独占し販るものである  
われらに購ふべき力もなく 又さるものを必要とせぬ  
いまやわれらは正しき道を行き われらの美をば創らねばならぬ  
芸術をもてあの灰色の労働を燃せ  
ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある  
都人よ 来つてわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ